



Title	四国山地の山仕事道具 : 暮らしを支える土佐刃物
Author(s)	高木, 泰伸
Citation	アジア太平洋論叢. 2025, 27(1), p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100865
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

四国山地の山仕事道具 —暮らしを支える土佐刃物—

Forestry and Woods Processing Tools Used in the Shikoku Mountains
Metallic Products from Tosa Area.

高木 泰伸*
TAKAKI Taishin

Abstract

This essay addresses the usage of forestry and woods processing tools that have been used in the *Shikoku* Mountains, and attempts to illuminate how the improvement of those tools and tool usage can affect people's way of life by conducting an ethnographic study on the relationship between people, tools, and techniques.

The subjects of the research are mainly old articles for everyday use owned by *Tobe Old Days and Art Museum* in *Ehime* Prefecture, such as saws and axes. These tools were used from the 19th century to the mid-20th century. In the *Shikoku* Mountains, *Tosa Hamono*, metallic tools made in *Kochi* Prefecture, were popular. Due to its high quality, *Tosa Hamono* were used throughout Japan and were even exported to East Asia. This essay also mentions the distribution of *Tosa Hamono*. Furthermore, this essay analyzes the oral history of people who actually engaged in forestry using traditional tools.

Keywords: Old Japanese Everyday Tools, Traditional Techniques, Metallic Products from Tosa Region, Forestry, Shikoku Mountains

I はじめに

明治時代の前半期にはこのあたりへ長州大工がたくさん来ていたそうですね。わたしの家は長州大島郡の寅吉という大工が明治十六年に建てたものです。その大工は寺川で三軒、越裏門（本川村）で二軒、高藪（本川村）でも二、三軒建てちょりますが、なかなか腕のよい大工じゃったと聞いちょります。屋根葺職人は広島県からきちょったそうなが、わたしが知ってからは地元の者が葺きよりました。桶屋は愛媛県の大三島から来よりました。

高知県寺川（いの町）で明治期に生まれた古老はこう回想する⁽¹⁾。四国山地というと山深く、ともすると他から隔絶した秘境のような印象を持つ人も少なくないだろう。しかし古老の回想からは江戸時代後期から明治以降、いろいろな職人が多方面から出稼ぎに来ており、人・モノ・技術の交流があったことを教えられる。

本稿では、特に明治期から高度成長期（概ね 19 世紀から 20 世紀半ば）にかけて四国山地で使われた山仕事、具体的には材木の伐採と製材に関する道具の使用法について考察する。同地域においては 1960 年代まで鋸や斧といった動力を伴わない、いわゆる伝統的な道具が主要産業である林業に使用されてきた⁽²⁾。そのような山仕事の道具の使用法から人と道具・技術の関係、さらにその変化に伴う暮らしの移り変わりを、当時を生きた人の語りから明らかにしていきたい。

また、本研究を行う背景にはモノの流通と人の移動の関係性にも注目したいという問題意識がある。モノ資料の分布を考察することで、明治以降の地域開発について、道具を使った人々の視点から叙述する方法を探ってみたい。後述するように、四国山地の生業を支えたのは、高知県で生産された土佐刃物である。その主たる生産地は現在の行政区分で言えば香美市・南国市・高知市・安芸市・須崎市などで（文末の図 2、以下関連地の位置は同図参照）、この高知県下で生産された鋸や斧が流通業者、四国山地で働く職人たちを介して広く分布していった歴史を検討してみたいと考えているが、それは容易なことではない。そこで、まずは本稿において土佐刃物の特色

* 大阪大学人文学研究科招へい研究員

とそれがどのように使用されていたのかに重点を置いて論じてみたい。なお、本稿で分析対象とする山仕事道具は、主として愛媛県砥部町にある砥部むかしのくらし館が所蔵する鋸、斧類である。そして、実際にその道具を見てもらいながら山仕事の経験者へのインタビュー調査を行った。そのインタビューの分析が本稿の重要な部分を占めている。

II 四国山地と土佐刃物

土佐刃物については香月節子氏・香月洋一郎氏の一連の研究があり、職人の語りを中核とした叙述は現代に続く土佐鍛冶の技術を明らかにしており、鉄製品に関する民俗学的研究には必読の書である⁽³⁾。本稿ではその研究成果をうけて、土佐鍛冶たちが作った鋸や斧の使用者の視点を重視しているが、まずは対象とする四国山地、および土佐刃物について簡単に紹介したい。



【写真 1】四国山中・高知県橋原町には長州大工の仕事が残る。三嶋神社（川西路地区）。

四国山地は古くから良質な木材の産地であり、先述のように江戸時代後期から明治時代には幾人もの職人が来訪していたことが確認されている。また瀬戸内海島嶼地域からは大工たちも出稼ぎに来ていた。その具体的な例を挙げれば、瀬戸内海西部に浮かぶ周防大島（現山口県大島郡周防大島町）からは材木を伐採する木挽、神社仏閣や家屋を建築する長州大工と呼ばれる大工などが同地域で仕事をしていた⁽⁴⁾。周防大島の東部にある下田八幡宮にはそのような出稼ぎの職人たちが寄進した彫刻や石造物が現在に伝わっている。また南東部に位置する沖家室島の泊清寺では再建時の材木を四国山地から伐り出して大洲（愛媛県大洲市）で筏を組んで島まで運んできたという⁽⁵⁾。同じような話は周防大島の各寺院にも伝わっている。ある寺では明治期の本堂の拡張時に四国から肱川の水系を用いて材木を運び出し、船で瀬戸内海を渡って島へ持ってきて、寺の正面の広い浜を埋めるほど積まれていたという伝承がある。周防大島出身の民俗学者・宮本常一の代表作である『忘れられた日本人』でも四国の山間地で活動した人びとの姿が描かれている⁽⁶⁾。同書に収録されていて文学作品としても評価される「土佐源氏」の冒頭にも同地で仕

事をした長州大工の話題が挿入されている。四国山地では木材という資源を介して歴史的に周辺地域との交流が行われてきたのである。

20 世紀に入ると四国山地の材木は周辺地域のみならず海外へも輸出されるようになる。例えば、肱川河口の長浜（現愛媛県大洲市）は全国でも有数の材木の集積地であった。全国の木材業者が集まる長浜の競りで西日本の木材価格が決まると言われていたほどであり、昭和初期には取扱量の半分が台湾、朝鮮半島、中国東北部へと送られるようになった⁽⁷⁾。

四国山地では現在はチェーンソーを用い、大規模な伐採では重機を使っているが、半世紀前までは人力による作業が続けられた。そこで使われたのが高知県の土佐鍛冶たちによって生産された土佐刃物である。土佐鍛冶は 17 世紀の江戸時代初期にその歴史を確認することができ、19 世紀の幕末期から明治期に鍛冶屋町の発達をみたと考えられている。主に山仕事道具（鳶口・斧・ハツリ）、木挽鋸（オガ）、大工道具、農具（クワ、土佐鎌）などの実用的な製品が生産された。特に明治以降、その性能と耐久性から広範に流通し、全国各地で使用されるようになった。近年では「土佐打刃物」としてブランド化を図り、切れ味の鋭い包丁などが、和食への関心の高まりから海外へ輸出するようになっていて、産地としても後継者を育てつつ技術が伝承されている。

四国の山間地の道の駅に立ち寄ると「土佐刃物」の幟を立てた刃物店、農機具店を目にすることがしばしばある。また、瀬戸内海を挟んだ兵庫県三木市は「鍛冶屋の里」として名高いが、同

地の道の駅みき・金物展示館でも土佐刃物が販売されていた。三木特産の鑿や鉋、小刀「肥後守」などに交じって、高知県産の鎌や鉋などが並べられている。店内で話を聞くと、刃物産地の三木であるが、農作業や山仕事の刃物類は昔から高知のものが多いという⁽⁸⁾。

先に紹介した周防大島でも土佐刃物が多く流通していたようだ。周防大島で農機具の修理や刃物研ぎをしている山本雅弘氏（1934 年生まれ）によると、島の東部では土佐の刃物が多く、特に東南部の小積・大積地区の人が持つてくるものには土佐の鎌が多かった。これは行商が入っていたかもしれないし、同じく東部にある金物屋が土佐の刃物を扱っていたのではないかという。山本氏が今使っている包丁は土佐のもので「○に十」の銘が入っているが、厚手の鎌にも同じ銘があり、さらにセンバガマといって薪にする松の枝を切り揃える鎌にも「土佐」の銘があった⁽⁹⁾。刃物研ぎの依頼は 20 年ほど前までは多かったが、最近では島内に安価な刃物を販売するホームセンターができ、刃物も消耗品として扱う人が多くなったということであった。道具をメンテナンスしながら使用していく感覚を持つ人も少なくなっているという。

山本氏の話にあるように瀬戸内海のこの島には多くの行商が訪れていて、鍛冶屋と使用者をつなぐ媒介者として、土佐刃物を島へもたらしたのだろう⁽¹⁰⁾。あるいは土佐の鍛冶屋自身が持ち込んだ可能性もあるし、冒頭に紹介した長州大工など出稼ぎのために移動した人も関係していることは想像に難くない。島民が実際に使っていた木挽き道具・大工道具が国指定重要有形民俗文化財「周防大島東部の生産用具」の中にも多数含まれており、土佐で造られたと推定されるものも少なくない⁽¹¹⁾。さらに島の中部の久賀地区で収集された国指定重要有形民俗文化財「久賀の諸職用具」のうち、船大工が使用する木挽鋸については圧倒的に土佐産のものが多い⁽¹²⁾。また宮本常一によると、周防大島の祭礼には鎌などの土佐刃物を商う露店が出店しており、島民たちは参詣時にそのような仕事道具を購入していたという⁽¹³⁾。

土佐刃物の流通については今後さらに研究を深めることとして、まずここでは四国山地を含めて土佐刃物が広く分布してきたことを確認しておきたい。

Ⅲ 支え合う職人たちの技

次に土佐刃物をめぐる職人の技術継承について考察してみたい。四国山地の山仕事道具に関係した問題からやや話は逸れるが、刃物産地として土佐の特色を考える上で重要なエピソードなので、ここで付言しておく。

2023 年 7 月に尾道市向島の櫓職人である瀬尾豊明氏を訪ねる機会を得た⁽¹⁴⁾。地元の生活文化を研究する砂田信行氏（吉和の生活を記録する会）の紹介によるもので、作業場には櫓や櫓の材料となる木材や製造機械が置かれていて、隅の棚には鋸や斧、鉋などの道具もきれいに整頓されていた。瀬尾氏は日本で唯一の櫓職人あり、全国各地から注文があるという。鶺鴒や祭祀の競船などの伝統行事は瀬尾氏の技術に支えられていると言っても過言ではない。ちょうど訪問した年の 3 月にも愛媛県宇和島地方から祭りに使う櫓 10 本の注文をうけて製作したという。

瀬尾氏の道具を見せてもらおうと木材を整形するハツリ（斧）に目がいった。よく使い込まれたハツリには「土佐興光」の銘があった。聞けば瀬尾氏が 20 代のころから使っているもので、地元尾道の金物屋で購入したのだという。尾道の周辺には向島の船大工や府中の箆笥職人など、木材を加工する有名産地があり、刃物を扱う店が何軒もあったという。

その「興光」の銘を手がかりに詳しく調べてみると、愛媛県松山市堀江で鍛冶屋を営んでいた白鷹高興氏、もしくは古代の和釘復元で有名な弟の白鷹幸伯氏の作であることが確認された。父親の代から鍛冶屋であった高興氏は土佐で一年修業をして「興光」の名前をもらい、その兄から



【写真 2】道の駅清流の里ひじかわ（大洲市肱川町鹿野川、2023 年 9 月）

鍛冶屋の技術を学んだ幸伯氏が「二代目興光」となり、伊予の地で仕事をする「土佐鍛冶」の技を受け継ぐ職人となった⁽¹⁵⁾。

土佐の地は様々な地域から来た鍛冶職人たちが腕を磨き合う技術の交流の場でもあった。例えば『愛媛県の諸職』を概観すると、白鷹幸伯氏を含めて 5 名の鍛冶屋についての報告があり、土佐で修業した者が 3 名、三木で修業した者が 1 名、修行地不明 1 名であった。このうち 1 人は白鷹高興氏のもとで仕事を覚えて、その後高知でも修業している。また坂本正夫氏の「土佐大工鋸鍛冶聞書」にも、話を聞いた古老の鋸鍛冶の仕事場には明治末年に弟子 6 人と三木（兵庫）から来た職人 2 名がいたという⁽¹⁶⁾。土佐は刃物という製品の産地というだけでなく、鍛冶屋技術の伝承地だったのである。

土佐では鍛冶の技術を他所から来た職人が学んで地元へ持ち帰り、そこで次の代へ伝承し、さらに研鑽を積んでいく。そして土佐鍛冶たちが作った鋸や刃物は様々な分野の職人たちによって用いられ、彼らの技術が様々な伝統文化が支えている。そのことを瀬尾氏が愛用する「興光」のハツリに教えられた。船を使う伝統文化の継承にとってはなくてはならない瀬尾氏の櫓作りが、今は亡き土佐鍛冶の製品に支えられているというのは感慨深いものがあった。確かな技術を持った職人同士が本人たちも意識しない中で無言に交わり合っているのである。



【写真 3】瀬尾氏が長年使うハツリには「興光」の銘があった。2023 年 7 月。

IV. 砥部むかしのくらし館所蔵の山仕事道具

それでは、四国山地ではどのような山仕事道具が、どのように使用されていたのか。ここでは愛媛県砥部町にある砥部むかしのくらし館が所蔵する鋸、刃物類を対象に分析してみたい。同館は現館長の豊島吉博氏の母・松子氏による収集品を収蔵展示する私立ミュージアムで、主な収蔵品として夜着・着物コレクション、地元の特産品の陶磁器の砥部焼コレクション、そして各種の民芸品・生産生活文化に関わる道具のコレクションがある。2021 年にリニューアルオープンして以降も様々なモノが寄贈されている。

同館が所蔵する鋸・斧などの木材加工に関わる道具は 39 点にのぼる。そのうち 24 点がリニューアル以前からの所蔵品で、木挽鋸、大工鋸に加えて氷切用の鋸、さらに米国産の押鋸などの多様な種類のコレクションがある。また最近になって砥部町内の A 家から 2 点の鋸、B 家からは 13 点の鉈・斧等が寄贈され、来歴が明確な資料群も所蔵されている。本研究が同館の資料を分析する理由として、来歴は不明であるが多様な種類の資料と比較検討できること、来歴が明確な資料群があることが挙げられる。特に B 家の寄贈品はまとまっており同地の自然に寄り添った生活を道具から伺うことができる。

さて、砥部町は砥部川に沿って集落が形成された谷間の町である。中央構造線上に位置することから鉱物資源が豊富で、それらを用いて 18 世紀から陶磁器の生産が盛んになり、現在でも特産品の砥部焼として人びとに親しまれている。

同館の館長であり、砥部町で生まれ育った豊島吉博氏（1951 年生）によると、前館長の松子氏のもとには古物商が古道具を持ち込んでいただけでなく、地元の人も使わなくなったいろいろな道具を寄贈していたという。よってリニューアル以前から所蔵する 24 点についての来歴は必ずしも明確ではないが、例えば氷切の鋸などは商店街にあった氷屋からもらったものではないだろうという。さらに同館が所在する砥部町大南商店街には金物屋が 1 軒、鍛冶屋が 2 軒あり、鍛冶屋はいわゆる野鍛冶で主に農具を扱っていたようである。そこから推測すると、土佐刃物をはじめ町外からの移入品は上記の金物屋がある程度扱っていて、時代によっては行商も入っていた可能性もある。そして地元の鍛冶屋は農具も作りながら、他所産のものも含めて道具のメンテナ

ンスを行っていたと考えられる。商店街に衣料品店も多く、下駄屋、さらに木炭屋もあった 1950 年～60 年代の話で、まだまだ身近なところが経済圏だった時代の話である。鍛冶屋は現在では電気店に代わっているという。



【写真 4】砥部むかしのくらし館が所蔵する鋸。

して側面はあったろうが、山林も含めた不動産財はその家の所有として子々孫々への財産を築くものとして考えられていた。農家でも類似の意識は見られ、まず田畑を所有していることを重視した。それは江戸期以来の自作農としての階級意識でもあったであろうが、さらに所有地を増やすことが家を栄えさせる上でも重要な位置を占めると考えられていた。「ヒトツクリ（一作り）もっておくこと」が農民の誇りでもあった。それは今日では失われた感性かもしれない。

産業構造が変化し、一次産業の比重が低下した現代では不動産価値が著しく沈下しているが、砥部を含む四国山地では半世紀ほど前まで「山持ち」は地域社会の中では尊敬の対象であり、局地的な威信財ともいうべき意味も持っていたと考えることができる。さらに想像を膨ら

せると、経済力も含めて山を管理できる信用がなければ山林所有を増やすことはできなかったのではないだろうか。豊島氏が語られた「周囲からの勧誘」には単なる売買の誘い以上に地域社会の中で山林所有が信用を重視していた可能性を秘めている。

さて、最近資料を寄贈した B 家も山林を所有していた。現在は衣料品店を営んでいるが、それは 3 代前からの家業で、もとは農業を生業にして山林も所有しており、自ら山林も管理をしていたという。そのことは寄贈されたモノからもうかがうことができる。伐採に使用する大型の鋸などは処分されてしまったようだが、写真 6 が倒木の際に鋸を入れる受口を作るのに用いる斧であ

また、豊島氏は続けて次のように教えてくれた⁽¹⁷⁾。

母方の陶磁器を製造する梅野精陶所（梅山窯）では燃料になる木材を確保するために多くの山を持っていました。また医者であった父も少し金が貯まると周囲からの勧誘があつて山を買っていました。その頃は山を持つことがステータスだったのです。手入れは人に任せていますが、我が家も山を所有しているんです。

焼物産業が町の主要産業であった砥部では、燃料材を確保するために山を所有することは窯元にとって必須であった。主として松材が利用され、伐り出した燃料材は馬に括りつけて運搬していたという。

もう一つ豊島氏の話で興味深いのがステータスとしての山林所有という問題である。もちろん将来的な木材販売を見込んだ資産運用と



上：【写真 5】B 家より寄贈された道具。鉈やエガマ、鎌など土佐で製作されたものが多い。左下：【写真 6】錆びた斧は伐採時に用いられた道具と考えられる。製作地は現時点で不明。

る。これが山仕事を生業にしていたことを物語っている。この斧は他の資料と異なり、持ち手の柄もなく、錆の腐食も著しいが、同家の家業を知る上で重要な資料である。また道具それぞれに名前が書かれており、そこから 1950 年頃から使用され道具であることが確認できた。また後述するように 13 点の鉋や鎌などうち 8 点が土佐で製作されたもので、2 点が土佐産の可能性のあるものと考えられる。

V. 高度成長期の四国山地の林業

次に四国の人びとは山地からどのような恵みを得ていたのか、そしてどんな道具が、どのようにして使用されていたのかをより具体的に見ていきたい。

その営みを教えてくれたのが、四国山地での山仕事の経験のある森岡数美氏（1950 年生）である⁽¹⁸⁾。森岡氏は砥部町に隣接する山村の愛媛県内子町小田の出身で、同地区の上川という集落に 8 人兄弟の末子として生まれた。父は 1908 年生まれ、母は 1913 年生まれであった。生家は山仕事と農業を生業としており、山が 10 町以上、水田が約 4 反、さらに畑もあった。山はスギが 9 割、ヒノキが 1 割くらいあった。田では自家用のコメを中心にして作っていた。コメの裏作にはオオムギを作り、またコムギも作っていた。その他クリを作ったり、牛を飼育したりもしていた。

森岡家では貯蓄ができると山林を増やした。1950 年代半ばには村から都市部へ出ていく人も多く、そういう人たちが所有していた山林を買っていた。あまり増やせば管理も大変ではないかと話したこともあったが、父は土地を何よりの財産として考えていた。先述のように少しでも余裕があれば山を増やしていくことがその当時は重要であったという。父親の頭の中には所有地の「地図」があり、山の状況がよくわかっていた。また母親が帳簿をつけて記録管理していた。

森岡氏も幼少期から家業を手伝い、高校を卒業するまで父親について山へ行き山仕事を手伝った。木は秋から冬にかけて伐り出す。この時期でなければ皮が剥げないためである。森岡氏が手伝っていた時代には 15 センチ角の建築材がとれる大きさに育った木、20～30 年のものを切り出していた。1960 年頃からそれまでよりも柱の細い住宅がたくさん建てられるようになった。分家した人が都市部に出るようになって、その人たちが住宅を建てるようになったためである。簡易な安い家で 12 坪の建坪で細い建築材を必要とした。そこで伐り出す木も何十年もかけて太くする必要はなくなったのである。

雪がとけて春になると冬までに伐り出したところに植林をする。植林作業が 6 月くらいまで続き、6 月から夏の間は植林したところを中心に下草を刈る。下草刈りには大鎌を使った。この大鎌も土佐鍛冶による製作であった。柄が約 1 メートルほどあり、その柄から (A) 水平に刃がついて湾曲したものと、柄に対して (B) 直角に刃がついた鎌があった。森岡氏は (A) の方が使いやすかったという。どちらを使うかは個人差があり、それぞれ使い手の好みによっていた。父親から使いやすい方を選べと言われた。そして大鎌を横に振るときに草が切れた方がよかったので、柄から刃が続く (A) 形状の方が使い勝手がよかった。手前に引くときに刈るような使い方の人は (B) の大鎌を使った。

冬にはエダウチをする。エダウチにはコシノコ（腰鋸）を使う。中学生くらいの時からエダウチを手伝ったという。一本梯子といって一本の木にカシ材の足場を打ち込んだ道具をかけて作業した。エダウチはケガをする者も多かった。それで父は安全管理のために厳しく教えることがあった。仕事のやり方、何をしたらよいか、何をしたら危ないかを兄たちの仕事を見て考え、父から教えられたという。

一日の仕事は、早朝に山へ行行って仕事をして、10 時ごろ休憩し、また仕事をする。昼食をとってから夕方まで仕事する。鋸は 2 本持っていった。長い鋸なので前が見えずに石に当ててしまった時には、昼飯、休憩を早々に切り上げて急いで目立てをして、午後の作業に備えることもあった。目立てはヤスリで自分でやった。道具のメンテナンスは全て自分でやっていた。丸太は切って搬出する。テンコロという金具を木に打ち込み人力で搬出した。

当時は建設ラッシュで、建築用の足場材の利用が多くなり、直径 5cm ほどの間伐材の需要が高まった。そこで 15 年ほど育てた間伐材を伐り出して売っていた。

森岡氏の話の中で高校入学時に足場材を売ってバイクを買ったエピソードが印象的だった。昭和 40 年頃で直径 5 センチの丸太が 1m100 円だった。半日伐り出して 1 本 8m~10m の材を 40 本くらい伐り出した。それを業者が買いに来た。バイクは 3 万円~4 万円し、スポーツタイプのバイクで 8 万くらいした。ガソリンが 1 リットル 45 円、昭和 45 年の初任給は 2 万円の時代であった。今では考えられないほど林業が好調の時代で、高校卒業後に会社に就職した時には父から林業の方が儲かると何度も言われたという。

森岡氏が父とともに林業を営んだのは、山間地の過疎化が進み都市へと人々が移り住み始めた時期でもあり、上記のように建築材の需要があった。戦後復興から高度成長期にかけて山林資源は日本の経済発展を支えていたことが森岡氏の語りからもうかがえる。さらに森岡氏の話が貴重なのは、鋸や鎌といった手仕事としての林業の経験者の語りが含まれているからである。

VI. 山地の暮らしを支える道具

森岡氏によると小田で使っていた鋸や刃物類は高知からのものが多かった。地元の金物屋があり、そこで山仕事の道具、農具類を揃えていたという。ただ 1930 年代には、森岡氏が父から聞いたところによると、土佐刃物を持った行商が祭りの時などに来っていたという。四国山中の他地域でもこのような県境を越えた交易があった。例えば愛媛県久万高原町美川では昭和戦前期まで高知側から来る行商との生活用品の日常的な物々交換があるなど、高知と愛媛の間には人・モノ・技術・情報の交流があった⁽¹⁹⁾。小田の場合には主要産業である林業や木材加工に用いる道具、農具などの土佐刃物が高知から入って来ていたようである。

木材の伐採には、長さが 1m を超え、持ち手が湾曲した鋸を用いた (写真 8)。木材の直径の 3 倍程度の刃渡りがあると伐採にはちょうどよかったという。大工鋸は力の調節がしやすいように持ち手が直線的だが、伐採用の鋸は持ち手となる部分が刃に足して湾曲しているので鋸を押さえる力は必要なく、鋸を木にただ当てて引けば切断することができた。

伐採時にはまず手斧で三角形の受口をつくる。受口を作っておかないと鋸を挽いて切り倒す時に、倒木の重さでせっかくの木が割けてしまう。森岡氏によると、斧を振るのは力があるので、受口作りにも鋸を用いたという。すなわち手斧で斜めの切り込みを入れ、水平に鋸を入れて受口を作っていた。この方が効率がよかった。鋸を斜めに入れることは難しいので、父親も斜めに手斧を入れて水平に鋸を入れて受口を作っていたのだという。受口を作るのには手斧だけを用いるものだと思っていたので、これには私も驚いた。森岡氏によると周りには手斧だけで受口を作る



【写真 7】手前が目立ての時に使うノコバサミ。奥に見えるのがテンコロで鋸とも呼称される。砥部むかしのくらし館蔵。



上：【写真 8】伐採用の鋸（長さ 126cm/刃渡り 84cm）。「土佐」の銘がある。

下：【写真 9】大工用の鋸（長さ 111cm/刃渡り 56cm）。ともに砥部むかしのくらし館蔵。

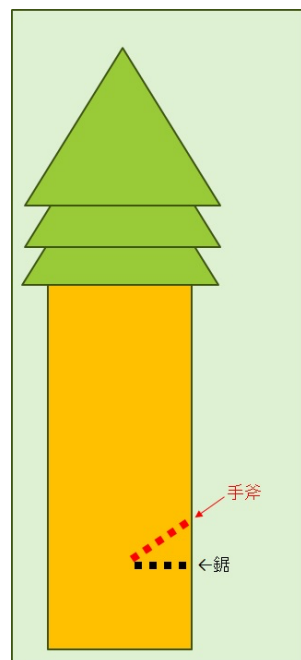
人も多かったという。そして追口にカシでつくった楔を打ち込んで倒木の方向を定めて鋸を入れていき伐り倒す。

北海道では受口を作るのに、根元部分を細く改良したテッサという手斧が好まれた⁽²⁰⁾。香月節子氏によると、そのテッサの生産地が土佐であり、地元の問屋、阿波（徳島県）の行商を介して全国へ流通し北海道の開拓にも用いられたという。特に「国勝」の銘がある今井国勝氏の製品は「伝説の鍛冶職人」として知られていた⁽²¹⁾

森岡氏の受口の作り方、土佐鍛冶による手斧の改良の問題は、人・道具・技術の関係を考える上で重要な意味を持っている。森岡氏らの場合には既存の道具を用いた使い手による使用法の工夫である。一方でテッサの改良は鍛冶職人の技術の研鑽による新たな道具の発明である。そこにはいずれも生産性を上げよう、良い仕事をしようという思いがあった。そして、重要なのは道具によって人の営みが規定されていくということである。古くは石器使用の時代のように斧だけ伐採していた時代もあったが、伐採に鋸が使用されるようになり、さらに森岡氏のように受口を作る時にも鋸を使うようになる。これは道具の発展があったからである。さらに北海道開拓も道具の改良によって進展していった。道具を改良するのは人であるが、その道具の使用によって新たな技術が生まれ、人びとの暮らしも規定されていくという事例である。

道具の改良として、さらに注目したいのが窓鋸とも呼称される改良鋸である。これは刃に一定間隔で隙間を施した鋸で、伐採時に出るオガクズを落とすことができ、効率よく鋸を挽くことができた。森岡氏によると伐採時には、どうしても木屑が鋸の目に詰まるのでそれを落とさなければならなかった。改良鋸を実際に使ったことはないが、戦後に入ってきた新しい鋸で同じ集落で使っている人もいて評判がよかったという。森岡家で使用しなかったのは、この鋸が出はじめですぐ後にエンジンが付いた動力式のチェーンソーが普及したためであった。改良鋸は会津（福島県）など他の産地でも製作されており、北海道開拓にも用いられたようである⁽²²⁾。土佐の鋸も北海道をはじめ国内各地に販売された他、台湾や東南アジアへも東京・大阪の商社を介して輸出されたという⁽²³⁾。ただ森岡氏の言によれば、非常に優れた鋸だったにもかかわらず、チェーンソーの出現という道具の動力化によって活躍期間は短かったとのことだった。香月氏もチェーンソーの普及を背景としながら、製作工程が多い鋸は専門の職人の退職によって徐々に伐採鋸の製造は衰退していったと当時の状況を分析している⁽²⁴⁾。

いま一つ、注目したのが A 家から寄贈された 2 本の鋸である(写真 11・12)。一本が全長 81cm・刃渡り 58cm で、もう一本が全長 73cm・刃渡り 46cm で、先に紹介した写真 8 より一回り短い。写真 12 には「土佐鋸 一級 登録商標 片央請合」との陰刻があり土佐刃物であ



【図 1】森岡氏による鋸を使った受口の作り方。



【写真 10】戦後に開発された改良鋸（長さ 105cm/刃渡り 81cm）。「土佐大柘町 ○高小松高重請合」の陰刻がある。砥部むかしのくらし館蔵。



上：【写真 11】伐採用の鋸（長さ 81cm/刃渡り 58cm/刃先 13cm）。
下：【写真 12】幅の狭い鋸（長さ 73cm/刃渡り 46cm/刃先 6cm）。
砥部むかしのくらし館蔵。

ることが確認できる。間伐などの伐採用にも使用できる長さであり、もしかすれば枝打用にも使用したものかもしれない。注目すべきは二つの鋸の刃先幅である。

写真で比較しても写真 12 の方が幅が狭いのがわかるだろう。実際に持ってみるとずいぶんと軽い。森岡氏によると、このような幅の狭い鋸は使ったこともないし、あまり見たこともない。鋸は幅が広いと安定して挽くことができ、細ければ糸鋸のように自由に動かして挽くことができる。多くの伐採鋸はある程度の幅があるものが常であったという。ただし山仕事は傾斜地を登り降りするので、荷物はできるだけ軽い方がいい。そこで鍛冶屋が工夫して作られた鋸ではないか、これくらいの大きさの鋸だと間伐の時に持って行って、エダウチもできるのではないかということだった。また細い建築材であればこれくらいの長さでも伐採することも出来たのではないか。あるいは製材用に用いられたのかもしれないとのことであった。ともかく A 家では二つの鋸を使い分けて使用していたと考えられる。ここにも道具の使い手と、必要性を考えた作り手との相互関係を見出すことができる。



【写真 13】製材に用いられたオガ（長さ 93cm/刃渡り 62cm/刃先 41cm）。砥部むかしのくらし館蔵。

Ⅶ 鋸が語る「百姓」の姿と相互扶助

森岡氏のインタビューでさらに興味深かったのがオガといわれる幅の広い木挽鋸についての話である。製材に使う縦挽きの鋸で、山間地の資料館・博物館であれば、どこにでも保管されていると言っても過言ではない。現在ではほとんど使わなくなり、幅広い形状が特殊なので、それを見せる展示にしている博物館も多い。森岡氏は以下のような話をしてくれた。

私が物心ついた時には使うことはなかったですが、近所のどこの家も保管していましたね。明治生まれの父の話では、結婚したら次は家を建てる。その家を建てる板を製材するのに使ったそうです。1 日 1 枚でもいいからといってオガを挽いて板を作ったと言います。そうして建材を貯めていったそうです。大工に頼めばそれだけ賃金がかかりますからね。材は自分の山にあるからそれを少しずつ板にしていっていったというわけです。

それから親類の家などが新築時に板が足りなくなるとそれを都合することもあったと言います。お互い様の助け合いです。そうやって貯めていた板を保管している家を何軒も見たとあります。私が物心ついたころになると大工が動力のついた丸鋸で製材するようになっていたので、オガを使っていたのは昭和のはじめくらいまでではないでしょうか。

先に述べたようにオガは現在使われることがほとんどなくなり、形もインパクトがあるので、私は大工や木挽きなどの専門的な職人が使う特殊な道具だと思い込んでいた。しかし森岡氏の話聞いて山間地では誰もが木挽きであり、木材の扱いに長けた人が多かったということを改めて教えられた。そして、専門の職人が使う割には資料館などの所蔵点数が多いというのではないかという思い込みを払拭してもらった。聞けば当たり前のことであるが、一昔前の人びとが自前で暮らしを立てており、今以上に「生活の専門家」であったことを改めて感じる話だった。

また森岡氏の話から当時の山間地での貨幣価値の大きさを改めて教えてもらった。なんでも自分たちでやることで、出来るだけ金銭的な支払いを押さえ、労働力の投下を優先する時代がつい最近まであった。機械化以前の時代には今以上に働力がかかった。他者に頼めばその分だけ支払いもより必要になった。そういう状況を補うのが相互扶助的な親族関係でもあったのである。さらに各家に建築材が保管されていたのは、新居の新築のためだけでなく、災害などの復興や補修

のためであったということも想像に難くない。そうして暮らしを支える大事な道具だったからこそ、オガは捨てられることなく家々に保管されていたのだろう。オガをめぐる森岡氏の語りは山間地の在りし日の暮らしの大切な部分が含まれていた。

VIII おわりに

本稿では四国山地の山仕事について、そこで使用された土佐刃物という道具を中心にしながら人・道具・技術の関係性を考察した。道具の改良により木材の伐り出し方（自然へのアプローチの仕方）が変化した。それは人の身体動作と深く関わっている。またオガをめぐる自家での製材で例示したように、道具の機械化によってライフスタイルも変化した。道具の製造もまた手仕事だった時代には、どのような道具を提供し、どのように使うのかという、道具の作り手と使い手とのやり取りがあった。本文中でも紹介した土佐鍛冶の白鷹幸伯氏は、鍛冶の名人について、以下のように述べている⁽²⁵⁾。

鍛冶屋には、名人がそういるわけではないのですよ。その道具を使う人の個性と、使う対象にピタッと焦点が合ったものをつくりだすことのできる人が名人だと思います。製品そのものに満足できるというのは当たり前ですがね。それからちょっとでも外れた者は名人ではないんですね。ということは、使う人の心理を的確にくみ取るだけの感性がやはり要求されると思うんですよ。

「使う人の心理」を慮る技術を身に付けた土佐鍛冶によって作られた刃物は日本全国に広がり、さらに台湾・東南アジアへもたらされた。土佐刃物に着目した人と道具と技術との関係を探ろうとする本研究は、今後は日本を含むアジアという規模でも考察を深めていきたい。

最後に、聞き取り調査（オーラルヒストリー）におけるモノ資料活用の有用性について述べておきたい。本稿の中核をなす森岡数美氏の計4回におよぶインタビューは、前半2回を森岡氏の生家周辺をめぐりつつ行い、後半の2回は砥部むかしのくらし館の所蔵資料を見てもらいながら行った。実際に使用された同系の道具を見ながらの方が技術的な側面を含めて山仕事のより具体的な話を伺うことが出来た。そして素人である聞き手の私もより明確なイメージを持って話を聞くことができた。下草刈りの話や、伐採時の受口の作り方の話、さらに鋸の大きさの話などは実際の道具がなければ聞き及ばなかったことが多いと思う。その意味で多数の道具を整理して保存公開されている砥部むかしのくらし館館長の豊島吉博氏の活動に何よりも敬意を表したい。

さらに紙幅の都合から詳述はしないが、北海道博物館のアーカイブスには土佐刃物の鋸や斧類が多数含まれており、ウェブ上に公開された道具の写真などを見てもらいながら聞き取りを行った。例えば伐採時の楔の使い方などは「おお、これこれ！これと同じようなもんです。ただし材質が違います」というように、より深い話につながるきっかけになった。北海道開拓と土佐刃物の関係については今後さらに考察を深めていきたいが、まずは良質なデータを公開されている同館の取り組みにも感謝したい。

このように暮らしの聞き書きには、実際に使用された道具を介することで語り手と聞き手の間に共通項ができ、より深い理解につながるものが少なくない。生活経験が変化していく中で、語る人と聞く人の両者の橋渡しとしてのモノ資料の重要性が今後高まることが予想されるのではないだろうか。そういった意味でモノ資料を適切に保管し、それに付随する情報を収集・記録して活用していくことが益々肝要になるだろう。

注

- (1) 坂本正夫 1994 『長州大工 東和町誌資料編 1』 東和町、105 頁。同部分は土佐郡本川村寺川の川村義武氏（明治 44 年生）の聞き書きである。
- (2) 本稿では煩雑さをさけるために「民具」の呼称を用いず、すべて「道具」という標記にした。なお「民具」の定義については、岩井宏實 2008 「はじめに」『絵引 民具の事典』河出書

- 房新社を参照。鋸や斧類は、動力を伴わない主として自然材を利用した伝統的民具で扱うことができる。
- (3) 香月節子・香月洋一郎 1986『むらの鍛冶屋』平凡社。香月節子 2015『鉄と火と水の技』慶友社。
 - (4) 宮本常一 1997「土佐で稼いだ長州大工」田村善次郎（編）『周防大島民俗誌 宮本常一著作集 40』未来社。
 - (5) 「宮本常一チャンネル」沖家室島泊清寺訪問第 2 回：2024 年 7 月 12 日閲覧。
<https://www.youtube.com/watch?v=UiXZioBGzco>
 - (6) 宮本常一 1971『忘れられた日本人 宮本常一著作集 10』未来社。
 - (7) 大洲市ホームページ：2024 年 7 月 3 日閲覧。
https://www.city.ozu.ehime.jp/bunkazaitanbounagahamaohashi_jp.html
 - (8) 2022 年 11 月 30 日現地調査。
 - (9) 山本氏雅弘氏インタビュー（2024 年 6 月 19 日）。
 - (10) 拙稿 2023「瀬戸内海で見聞いた尾道のこと」『広島民俗』49 号。
 - (11) 宮本常一記念館 2017『宮本常一コレクションガイド』みずのわ出版、p55。
 - (12) 山口県大島郡久賀町教育委員会 1981『周防久賀の諸職一石工等諸職調査報告書（二）』。ただし桶屋道具については木挽鋸も含めて、兵庫県三木産のものが多く、同じ地域でこのような違いが生じる理由は今後の課題としたい。
 - (13) 宮本常一・香月洋一郎（編）2008『私の日本地図 9 周防大島』宮本常一著作集別集、未来社、p16。
 - (14) 瀬尾氏については、川口祐二 2013『『ろ』は『櫓』です一向島』『海へ、島へー漁村異聞その 3』ドメス出版の聞き書きが詳しい。
 - (15) 白鷹幸伯 1997『鉄、千年のいのち』草思社。
 - (16) 坂本正夫 1983「土佐大工鋸鍛冶問書」『土佐民俗』40 土佐民俗学会。
 - (17) 豊島吉博氏インタビュー（2024 年 6 月 25 日）。
 - (18) 森岡数美氏には 2023 年 7 月 4 日に内子町小田をめぐり、追加で同 7 月 14 日にインタビューをした。さらに 2024 年 6 月 20 日および 7 月 4 日の 2 度にわたり砥部むかしのくらし館所蔵品を見てもらいながら林業の技術的な側面を中心に話を聞いた。以下の森岡氏に関連する記述はこれらインタビューに基づくものである。
 - (19) 「えひめ、人とモノの流れ（平成 19 年度）」データベース『えひめの記憶』：2024 年 7 月 31 日閲覧。<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/17/view/2676>
 - (20) 青柳かつら 2018「冬山造材を支えた『テッサ』」『森のちゃれんがニュース』Vol.14、北海道博物館。
 - (21) 前掲、香月節子 2015。
 - (22) 内山大介 2021「会津鋸の生産と流通」（佐野賢二編『現代民俗学考』春風社）、p588
 - (23) 前掲、香月節子 2015、p48-49
 - (24) 同前、p209-211
 - (25) 前掲、白鷹 1997、p192-193

引用文献

- 青柳かつら 2018「冬山造材を支えた『テッサ』」『森のちゃれんがニュース』Vol.14、北海道博物館、3 頁。
- 岩井宏實 2008「はじめに」『絵引 民具の事典』河出書房新社、3-8 頁。
- 内山大介 2021「会津鋸の生産と流通」佐野賢二編『現代民俗学考』春風社、581-601 頁。
- 香月節子・香月洋一郎 1986『むらの鍛冶屋』平凡社。
- 香月節子 2015『鉄と火と水の技』慶友社。
- 川口祐二 2013『『ろ』は『櫓』です一向島』『海へ、島へー漁村異聞その 3』ドメス出版、159-177 頁。

坂本正夫 1983 「土佐大工鋸鍛冶聞書」『土佐民俗』40 土佐民俗学会、14-17 頁。

坂本正夫 1994 『長州大工 東和町誌資料編 1』東和町。

白鷹幸伯 1997 『鉄、千年のいのち』草思社。

高木泰伸 2023 「瀬戸内海で見聞した『尾道』のこと」『広島民俗』49 号、51-55 頁。

宮本常一 1971 『忘れられた日本人 宮本常一著作集 10』未来社。

宮本常一 1997 「土佐で稼いだ長州大工」田村善次郎(編)『周防大島民俗誌 宮本常一著作集 40』未来社、34-42 頁。

宮本常一・香月洋一郎(編) 2008 『私の日本地図 9 周防大島』宮本常一著作集別集、未来社。

宮本常一記念館(編) 2017 『宮本常一コレクションガイド』みずのわ出版。

山口県大島郡久賀町教育委員会(編) 1981 『周防久賀の諸職一石工等諸職調査報告書(二)』久賀町久賀町教育委員会。

ウェブサイト

「えひめ、人とモノの流れ(平成 19 年度)」(データベース『えひめの記憶』): 2024 年 7 月 31 日閲覧。<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:l/17/view/2676>

「大洲市ホームページ」: 2024 年 7 月 3 日閲覧。

https://www.city.ozu.ehime.jp/bunkazaitanbounagahamaohashi_jp.html

「宮本常一チャンネル」沖家室島泊清寺訪問第 2 回: 2024 年 7 月 12 日閲覧。

<https://www.youtube.com/watch?v=UiXZioBGzco>

【図 2】関係地位置図

